

書

評

坂井建雄（著）

解剖実習カラーテキスト

石田 肇

琉球大学大学院医学研究科教授・人体解剖学講座

山形大学の学生時代に、浦良治先生の『人体解剖学実習』を用いて勉強させていただいたことを、今も鮮明に覚えている。ラテン語の世界に触れた最初の感動があった。長崎大学に奉職した折には、浦先生の実習書を使った。その後、札幌医科大学では、大学独自の実習書で指導に当たった。1998年に琉球大学に赴任してからは、定番である寺田春水先生・藤田恒夫先生の『解剖実習の手びき』を用いてきた。それぞれに素晴らしい実習書であった。最近では、2013年に、『Gray's Clinical Photographic Dissector of the Human Body』が出版されたので、これも取り寄せてみた。

しかしこれらの実習書を使う医学生から、「楔形に切り取る」の「楔形」がわからない、「あばた状に」の「あばた」がわからないといった声をきくことが多くなった。他の大学医学部の教授に聞いても、同じような状況で、いろいろ模索しておられるようだ。

このたび、2013年3月に坂井建雄先生の『解剖実習カラーテキスト』が出版された。そこで、琉球大学では、この実習書を採用することにした。実は、2012年の春に、坂井建雄先生から実習書の出版計画をお聞きし、草稿の資料をいただき、4年生の臨床解剖実習で使ってみた。私もほぼ1か月毎日参加した。

まず、実習内容が図とともに、見開き2ページにまとめてあり、とてもわかりやすい。解剖の手順が、箇条書きで述べてある点も素晴らしい。

本書に示されている実習の手順を少し紹介する。背部等の筋の解剖は、学生にはわかりにくいところである。本書では、筋を起始か停止、もしくはその両方で切断するが、支配神経は残す方法が採られている。これは、肉眼解剖学の基本であり、学生にもわかりやすい。骨盤部の解剖、特に会陰部の解剖手技は簡潔明瞭である。さらに、中耳の解剖は、いつも至難の業であるが、内頭蓋底から入る方法はかなり良いのではないかと思います。

頭部と体幹との切り離しも困難を極めるが、後頭骨を広く開放することにより解決している。これで、迷走神経、交感神経幹、さらには舌咽神経が保存できる。まだまだ良い点はいくつもあるが、紙面の都合上省略する。4年生の評判も上々であった。

実際に本書を見てみると、“Lecture”と“Clinical View”がほぼ毎節についていて、学生の理解を深めると思われる。実習内容が单元ごとにコンパクトにまとめられているため、各大学の実際に合わせた使い方もできるものと思う。この秋からの解剖実習が楽しみである。

以上、実際に『解剖実習カラーテキスト』を用いて、解剖実習を行った者として、この実習書を強くお勧めしたい。

●B5/頁 384/2013 年/定価 6,720 円

(本体 6,400 円+税 5%)

[ISBN978-4-260-01702-2]

医学書院 刊